

練馬区基本構想審議会 第3回学習会  
(新基本構想についての講演会)  
講演録

平成21年1月8日  
練馬区役所本庁舎アトリウム棟  
地下多目的会議室

講演テーマ：社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）  
形成の基盤としてのコミュニティ

講師：大屋幸恵副会長（武蔵大学社会学部教授）

■大屋幸恵副会長

皆さんこんばんは。

武蔵大学の大屋でございます。今、ご紹介いただきましたけれども、私の専門は社会学です。社会学を30年近く学んできておりますが、最近では研究・教育ということだけではなく、いろいろなかたちで行政にかかわらせていただき、理論だけではなくそれを現実の生活でどのように適応させたり、検証できるのかを知る機会にさせていただいています。さらに、実際に自分も子育てをしながら仕事をしていきますので、働く女性にとっては身近なかつ大きな問題である「仕事と家庭の両立」という問題、大小さまざまですが日々起こる問題にどう対処すれば乗り越えていけるのかに、頭を悩ますというリアリティあふれる毎日を実践しております。大学では、「関係形成の社会学」をテーマにゼミを持っております。具体的には人と人との関係、いわゆるコミュニケーションの効用とか、人と物との関係、消費社会学ですね、さらに、人と集団や組織との関係性という事柄について、具体的にアンケートやインタビュー調査を通して実証的に研究したり、学生の卒業論文の指導をしております。

社会学は基本的に社会問題を大きなテーマとする学問であると認識しています。最近、新聞やメディアの報道などでも、「生きづらさ」という言葉でくくられているような事柄が問題になっています。貧困や労働など生活をしていくことが困難であるというだけではなく、組織や人間関係の中で悩み、自分らしく生きていくことが難しいという意味合いで、「生きづらい社会」ということが言われるようになってきています。このような状況に関連して、授業ではアイデンティティ（自己同一性）、つまり、「自分らしさとは何か」

「他者とのつながりをどう考えるのか」というテーマに関連した講義を担当しています。

本日は、現代社会においてより良い人間関係や社会との関係を築くためには何が必要なのかという大きな問題を設定しそれを解決するための考え方として、あまりお耳になじまない言葉かもしれませんが、社会関係資本、ソーシャル・キャピタルというものと、自分らしく生きるために必要となるアイデンティティ形成との関係、さらに、社会関係資本の形成とコミュニティがいかにかわりがあるのか、少し強調するといかに重要であるのかというようなことを、お話しさせていただきたいと思います。

私は大学の授業のときにもスライドのプリントを配らないようにしていますので、皆様にもそのようなレジュメはお配りしません。グラフ等が出てきますので、ご面倒ですがレジュメと画面と行ったり来たりして、聞いていただければと思いますので、よろしく願います。

まず、世界的な傾向として、コミュニティの機能は低下していると言われていています。つまり、これは日本だけではなくて、アメリカ、ヨーロッパでも同様ということです。私自身の研究エリアとしては、ヨーロッパ、特にフランスがメインなのですが、フランスでも都市部を除くいわゆる地方ですと、従来型のコミュニティというものが存在していたのですが、近年では地方においても、人間関係や地域との関係性が随分希薄になってきているということを実際に耳にします。

日本の状況についてみてみます。レジュメに書いていますが、国土交通省が2005年8月に出した「大都市圏におけるコミュニティの再生・創出に関する調査報告書」をもとに、大都市圏における「地域コミュニティ」の状況を、まず基本的な共通の情報として説明させていただきます。

練馬区の基本構想審議会の中間のまとめの中では「地域コミュニティを基盤として」という言葉がたくさん出てきます。私も今回、中間のまとめについて区民の皆さんに意見交換会等で説明する立場でしたが、正直に言うところの用語には少し違和感があります。何故かというと、「コミュニティ」のとらえ方というのは、まさに人それぞれというところがあります。ですので、中間のまとめの中で言っている「地域コミュニティ」というと、従来のような、町内会・自治会をベースにしていると考えられる方が多いのではないかと思います。しかし、私の私見としてはそうであってほしくないというのが正直なところですので、今日はなぜそうなのかという理由を説明させていただきたいという意図もあります。

では、地域コミュニティへの参加の状況ですが、町内会、自治会の参加状況というのは、加入率でみると40%強です。他の活動の状況をみていくと、いろいろな活動への参加があるように見えますが、質問の回答方式が複数回答ですので、ある活動参加する方は他の活動にも参加する傾向がみられますので、実際の活動人数ということになるとかなり数値は低くなります。私の指導教授が昔よく「人にものを頼むときは忙しい人に頼む」と言っていました。暇な人に頼んでもすぐにやってくれかというところという訳ではなく、かえ

って忙しい人に頼んだ方が忙しいながらも何とかやってくれる、ということなのですが、いろいろと教わったことの中で経験的にも一番の真実だったなと感じているところです。それはさておき、データの結果からも経験的にも、文化的・学習的クラブ等に入っていたり地域活動をやっておられるような方は、町会や自治会の活動もやっていることが多い一方で、「まったく参加していない」が50%を超えており地域活動の参加状況は二極化されていることがわかります。

その参加状況について、国土交通省の調査報告書ではさらに人口密度別にクロス分析を行っています。人口密度が非常に高いところは町会、自治会の加入率は27.1%、2,000人未満のところになるとようやく50%を超えるようになってきており、人口密度と地域活動への参加状況には関連性があることがわかります。

次に、地域が抱える課題についてです。練馬区でも状況はほとんど変わらないと思いますが、「地域の治安の向上」であるとか「ごみの問題」、「災害時の対応」などに対するポイントが高くなっており、「安心・安全、まちの美化」というようなことがらが上位に出ています逆に相対的に下位に位置づけられているもの、日頃はっきりと問題として認識されていないものは、「学習機会づくり」や「外国人との交流」、「乳幼児の保育環境」等が挙げられます。後で岩崎委員から生涯学習のお話がありますが、この下位のほうにあるものも、私たち研究者からするとぜひとも区民のみなさんに聞いてほしい、参加してほしいと思っているテーマなのですが、意外と問題意識としては上がってはこないという現状が把握できます。

また、レジュメですと1の(3)のところにあるように、そういう活動を熱心になさっている人と、そうでない人を分ける要因は何かということが少なからずデータから読みとれます。まず、年齢や居住地域、いつごろから住み始めたのか、いわゆるコミュニティ活動への参加度合いなど、7項目でクロス分析をしていますが、これを見てみると、レジュメの(3)①「積極的参加者の特徴」としては、「積極的に参加している人」で棒グラフの値が大きいところをみていけばいいのですが、まず、「知り合いがかなり多い」ことであることがわかります。このスコアが一番高いことから、コミュニティ活動への参加度合いにとって大きな影響を及ぼす要因が何かと言われた場合、やはりここ「知り合いの多さ」がキーポイントという子になると思います。これはコロンブスの卵といったような状況ともいえます。「知り合いが多いから参加する」あるいは「参加するから知り合いが多い」どっちが鶏でどっちが卵か分かりませんが、知り合いが多い方のほうが参加の度合いが高まるということが調査結果からも導き出されてくるんですね。

さらに、レジュメにありますように、「住んでいる地域の可住地人口密度が5,000人未満である」とか、それから「祖父母の代より以前から住んでいる」、「60歳以上」の方というのが地域活動に「非常に熱心に」参加をされていることを、このグラフから読み取ることができます。いわゆる親密な人間関係が築けているということ、さらに、災害や犯罪時の信頼意識度といえますか、そういうようなところも、参加者の意識は強いと出てきてい

る。そういう信頼感があるというような方が積極的に地域活動に参加するということです。

逆に、消極的な参加者の特徴というのは、「知り合いはいない」し、「人口密度は非常に高い」、さらに、「住民活動をやっているかどうかは知らない」ということです。それから年代としては20代、30代の人であるということも、消極的な参加者の特徴として上げられます。ですので、地域活動あるいはコミュニティ活動を推進するためには、比較的若い世代に親密な関係や信頼感をつくり出すというような工夫が重要ということになります。

アメリカのある調査データでは、ボランティアや地域のクラブの参加、家でのパーティー、教会への出席、これは非常にアメリカ的ですが、そういったものを見ていくと、ある程度、回数が多い人がより幸福感を感じているという結果がでています。ところが、これが40回を超えるあたりから幸福感がガクンと下がっていきます。この結果から逆算すると、月に3回とか4回になると負担を感じてくるということになるので、みんなで集まったりする活動の頻度というのは月1、2回程度が適度ということです。余り負担なく楽しく、親密な関係性をつくるというような、会の運営の仕方をどのようにすれば良いのかというのは、こういうことから読み取れるのではないかと思います。

次に、タイトルに挙げている社会関係資本とはどのようなことなのかについてお話しします。この社会関係資本の研究では、先行研究として3人の研究者が挙げられることが多いですが、本日参考にしてているのは、アメリカの政治学者、パットナム（ロバート・D・パットナム）です。レジュメを見ていただくと分かりますが、日本でも『孤独なボウリング』というタイトルの訳書が出ています。原著は「Bowling Alone」です。タイトルにあるボウリングですが、1960年代から70年代にかけては、アメリカでも日本でも地域に一つ、二つのボウリング場がありました。そこでひとりぼっちでボウリングをするということを示しています。私もWiiSports「ウィースポーツ」を娘にねだられて買って、ボウリングなどをやったりしていましたが、複数であることを前提にしているゲームを一人でやるというのは相当寂しいなと思います。だれかが一緒にいて、「ストライクが出た」「ガーターだった」というのを言われて初めて楽しいわけですが、それをひとりぼっちでやる。あるいはボウリング場自体が閉鎖されたりなど、そういった地域ってどうなのかということが、やはりアメリカでもコミュニティ活動、コミュニティのパワーというのが非常に衰退していることの象徴となっていて、このようなタイトルがつけられたわけです。

その著書の中でパットナムは、「社会関係資本が指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である」と説明しています。

互酬性というのは、たとえば、私が何か人に物をあげたときに、今すぐというわけではないけれども、相手も何かをもらったりしたときにはおすそ分けとか、お返しというようなかたちで戻ってくるというような関係性のことです。そういうことがあるからこそ、自分が人にしてあげられるときにはしてあげたいし、困ったときには人からやってもらえるというようなある種の暗黙のルールがあると思います。ところが、そういったものが今

のアメリカの地域社会でも低下、少なくなってしまうということが1990年代、80年代から90年代にかけて問題として認識されるようになってきたということです。

それから、フランスの社会学者、ブルデュー（ピエール・ブルデュー）は、文化資本についての研究をしていましたが、その中で相互承認、相互認識からなる持続的な関係ネットワーク、人間関係の総体を「社会資本」と呼んでいます、それは資力、お金と同じようなものであると言っています。

社会学で「アイデンティティ」をどう定義づけるかという、自分が自分であるということの感覚、自己同一性という日本語訳がついていますが、自分だけで私はこうだというふうに思っている、それでアイデンティティが保たれるというのではないのです。それは、私は私であるということ、だれかほかの人、他者が承認してくれる、認めてくれる。「私はこうだよ」と言ったら「あなたはそうだよ。それでいいんだよ」というふうに共感したり承認してくれたりすることによって、私というものの存在が意味づけられ、実感されるというような考え方をしまう。従って、ブルデューの言う社会資本というのは、相互承認であるとか相互認識、いわゆるつき合いこそが人間が生きていく中で一番大切な資本に等しい、お金と同じようなことだという考え方を提示しています。

「友達の友達」はみな友達、いわゆるイツ・ア・スモール・ワールド的な関係は、どんどん増幅されて、物理的にも精神的にも利益、効用を生み出すことが可能になります。たとえば、「あなたはだれだれさんの友達だよ」というようなことでも、私のことを知っている人がたくさんいると思えば、自分がここに存在しているというような実感を持つことができるのです。

そのネットワークを形成しているのが、基本的には、家庭であったり、学校や職場などの所属集団ですが、その中間の、今は少ないですが、「地域」でそういったものがあると、なお一層人間の発達には非常に有益であるというのが、今回のお話の趣旨です。私も区内に住んでおり、いわゆる町会に加入しています。それで、私も町会の委員として神社の掃除とか夏祭りの準備とか、そのようなことも当番で当然やっていますけれども、私の小学生の子どももそれなりに「ご近所づきあい」をしているそうです。どのようなことかという、ご近所の方にお会いしたときには必ずあいさつをする。本当に他愛のないことなのですが、そういうことを私はあまり知らなくて、隣の奥さんから「お子さんがいつも挨拶をしてくれるわよ」ということを聞いて、ちょっと驚きました。結構シャイな子なので、そのようなことしているとは思っていませんでしたので、「あなた、そういうことしてたの」と尋ねたら「そうよ」と。つい「どうして」と聞いたのですが、「だから、近所づきあいよ」とこのと。職業がらさらに、「何でそんなことしているの」と聞くと、先ほどの安心・安全ではないですけれども、「何か災害があったときにあの子は〇〇さんの家の子どもだと誰かに分かってもらわないと困るから」という答えが返ってきました。学校で指導されてのことかもしれませんが、そういった自分の存在というのを家族以外の、さらに、学校の友達以外の誰かに知ってもらっていることが安心だという感覚は子どもでもあるわけで

す。ですので、先ほど地域社会での信頼感、信頼意識度をなぜ醸成しなければならないのかということも、このようなことからお分かりいただけるのではないのでしょうか。

では、実際に社会関係資本のつくり方についてみていきます。社会関係資本の形成パターンは二つあるのですが、まず、NPOやボランティア団体、いわゆる市民活動団体といわれているようなものがカテゴライズされる「橋渡し型」というものです。住んでいる地域とか年齢や性別、職業などにあまり関係なく、より広いアイデンティティや互酬性を生み出すことを可能にする組織のパターンなので、外部資源との連携や情報伝播という点にすぐれています。日ごろのコミュニケーションや関係性は余り強くはないけれども、何かあったときの機動力、あるテーマに対する問題解決能力は非常に強いということで、「弱い紐帯の強さ」と、グラノヴェッターという学者が名づけています。

それから、現在の町内会や自治会にみられるようなパターンは「結束型」といいます。外国ですと、同じエリアに住んでいるとか同族や民族などといった「地縁」、「血縁」、つまり同質性を重視するという組織パターンなのですが、これは「内向きの指向」ということで、外から入ってくる人に対して非常に排他的であるという特徴をもちます。あなたはニューカマーでしょう、新参者でしょう。だから、この地域のことには口を出さないというような、異質性を非常に嫌うというようなことです。

私も練馬に住んで20年ちょっと、今の町内に住んで11、2年になりますが、町内会のいろいろなものに参加すると、地主とか、その一族といったような人たちが多く、「珍しく若いおっかさんが出てきたね」あるいは「何で女が出てくるんだ」みたいな空気が結構あり、正直不愉快な思いをすることが多いわけです。このようなことが、「排他的なアイデンティティと等質な集団」という事例になるかと思えます。しかし、そういった結束型の集団にも良い面は当然ありますけれども、人口も70万人を超えて、非常に都市型の構造を持つ練馬区にあっては、「橋渡し型」というような異質な人を包含するタイプのコミュニティのあり方というものも盛り込まなければ、今後の市民活動やコミュニティというようなものを具現していくには難しいのではないかと考えている次第です。

レジュメの2ページ目にも書いていますが、社会関係資本が高い地域なのか低い地域なのを測定する変数としては、大きく五つのものがあります。その具体的な内容がスライドに提示している<表>にあるように、①「コミュニティ組織生活の指標」というところで見ると、前年に地域組織やクラブの委員を務めたか否か、クラブの会合への出席率、それからグループ所属の平均数はどうか、ということです。また②「公的問題への参加の指標」ですが、これは大統領選挙での投票率や地域や学校に関する公的会合への出席率でみていきます。さらに、③「コミュニティボランティア活動の指標」ですが、ここでは、ボランティアへの参加回数のみならず「人口1,000人当たりの非営利組織数」といったことも、社会関係資本がつくられるか否かの測定の変数に加えられています。

それから、友人との交流やホームパーティの開催回数をみている④「インフォーマルな社交性」や他者への信頼意識による⑤「社会的信頼の指標」があり、この①～⑤の合成と

して社会関係資本を計測します。ここにもありますが、「大半の人は信頼できる」というふうな確証を持っている人は、やはりいろいろな活動や会合へ出ていけるわけです。

アメリカでも、1960年代からの約30年間で大幅に社会関係資本は衰退したとパットナムは指摘しています。その要因の第1として、世代の変化いわゆるジェネレーションギャップがあげられています。戦前世代とベビーブーマー、それから団塊ジュニアと言われている人とは、意識というのが非常に異なってくる。それから、「娯楽の個人化」とか「労働の過重化」、「都市のスプロール化」というような要因が挙げられています。

世代間の日常行動の比較の具体的な例としては、1900年に生まれた人と1960年に生まれた人を比較してみると、投票率や新聞の購読率であるとか、信頼感、それからグループ所属についてみると、グラフのカーブは右肩下がりですね。これはちゃんと学歴要因を抜いたかたちでグラフがつけられています。1900年に生まれた方々が一生懸命に社会関係資本を蓄積していったわけですけども、60年代から、急激に上昇した分を喪失していくという形になっています。

これについてさらに詳しくみると、国を愛するとか地域を愛するという愛国的なもの、いわゆる「価値観」が、1934年以前に生まれた人や戦前世代、それと、ベビーブーマーと言われている人たちの世代、さらにそのベビーブーマーのジュニアの4つの世代間でいかに意識が異なるのかというと、戦前世代の方々の意識が高い。逆に、「金銭」であるとか「自己達成」に対する意識となると、若い世代のほうが高くなるという傾向がみられます。他のデータでも、「物質的な満足」というようなものを良い暮らしの一部というふうに答える人が全体の3分の2、それと同時に、「社会に貢献する仕事は非常に良い暮らしの一部である」と答えるのは3分の1です。このように重視する価値観が変わってきているということが、コミュニティ活動への参加や他者への信頼感から構成される社会関係資本の変化、衰退につながっているといえます。

スライドに提示しているグラフは、2006年に私の4年生のゼミで実施したアンケート調査の結果なのですが、大学生が一番支持している人生観というのは、「幸せな家庭」(42.2%)だそうです。2番目は随分数値は落ちますが、「今日を楽しく生きたい」(18.5%)ですね。私たち大人が高くあってほしいなと思うような価値観(例えば「社会をより良くしたい」(3.6%)や「ボランティアや奉仕活動」(0.4%)など)は、非常に低い数値となっています。また、物質的に豊かな社会に生まれた世代ですので、「豊かさよりも自分のやりたいこと」という項目も支持を集めています。調査を実施した2年前にはそれでも良かったかもしれませんが、昨年の後半からは、経済的不況がただならぬ状態になってきていますので、学生にとっても自分のしたいことよりもとにかく就職できればよしとする雰囲気が漂っています。ですので、新たに調査をすると違った結果になるのかもしれませんが、やはり社会的な関心というよりも自己実現であるとか、個人的、私的な生活に対する思い入れは強いように感じられます。若い世代はとくに、自分のアイデンティティとかプライドを傷つけられることに対して非常にセンシティブ(鋭敏)で、他者とどうかかわ

っていくのかということになると、非常にネガティブというかナイーブなのですが、これは日本では若い世代だけではなく成人にもあてはまることです。自分のことを分かってくれていると思う人とは仲良くできるが、新たにそういう関係を作ろうとしない、つまり人間関係を広げていこうというような意識や社交性に欠ける人が多いということです。

そこで、人間関係の中でいかに信頼を得るのかを考えていく上で、コミュニティがいかに重要性をもつのかについて、最後にまとめたいと思います。アメリカの社会学者でマッキーバーという人がいます。まず、レジユメにある「アソシエーション」という用語ですが、これに「自発的結社」という日本語訳がつけられており、コミュニティは共同生活の行われている生活空間であり、そこでの関係性はまさに「アソシエーションな関係である」と捉えています。コミュニティは、共同の利害、関心というようなものが一致する、追求する人々の集団であるということです。日本で、こうした自発的な集団となると、町会や自治会、市民活動団体、NPOなどとなりますが、アソシエーション論の見地からすると、「地域コミュニティ」といった場合、イコール町会、自治会だけということにはならないのです。いろいろな課題を解決するには市民活動団体やNPO団体という自発的な結社が、自由に円滑に組織を運営していくような仕組みというの、今回の基本構想の中では考えていく必要があるのではないかと、意見を交換会の際にはお話をさせていただきました。

それから、カナダのソーシャルワーカーでリーという人がいるのですが、リーは、コミュニティというのは先進的な、あるいは経済的な制度と家族や個人の生活とのインターフェース、共通領域であると述べています。

北米、いわゆるアメリカとカナダですが、彼らの多くは、人生の中心は家族にあると考えをもっているため、家族が満足しない暮らし方はいかかなものか、といった考え方をします。逆に日本の場合は、仕事のためには家族も犠牲にしても致し方ないと考えがちですが、改めて家族を中心にして社会（政治や経済）との関係性をみていくと、家族がダイレクトに社会に接する、つながるのではなく中間的な存在として、コミュニティというのがあるのです。子どもを育てる、自分自身もより成長するためには、コミュニティは不可欠だという考え方です。コミュニティの中で、いろいろ人とかかわることによって新たなコミュニティというようなことが見えてきます。つまり、自分が住んでいる地域の中に、またさらにいろいろなコミュニティがあるということを再発見して、つなげていく、ネットワークという関係性の中で、自分を成長させていくという考え方があるということです。

コミュニティに参加するのはそういった人間関係というようなものを豊かにするためであると、それは、経済的な豊かさではなく、豊かさの質を問い直すこと、つまり、自分が幸福や満足に思う対象の変更といったことが非常に重要なポイントになります。

ですので、町会の活動に参加して、掃除させられたとか、面倒だというような言い方ではなく、みんなが良くなるから、あるいはそれが当たり前に行きであるというように思えるようになることが大切ということなのですが、正直なところ、私自身もまだそのような



意識を持ち得ていないところがありますけれども、多くの人が自分の生活のことだけを考えるのではない次の世代へもさまざま意味での「豊かさ」を引き継いでいけるような持続可能な社会へのパラダイム転換というのが非常に重要になります。

始めからある問題を解決しようと思ってコミュニティ組織に参加するという人はあまりいないでしょう。コミュニティ組織に参加することによって、はじめてコミュニティの中でどんな問題があるのかを知ることができます。お話の始めの方で、20代の方は「住民活動について知らない」というデータが出ていました。また他の調査から、若い世代は社会的関心が薄く、自分から積極的に他者との関係を作っていくことも苦手というデータがあります。しかし逆に、若い人たちにもっとコミュニティ活動に参加する機会が増えれば、いろいろな能力を身につけていくことが可能になりますし、アイデンティティの形成にとっても非常に有益ということになります。自分が住んでいる所で何が行われているのかを知り、自分が不利益を被っている場合には自ら解決する力、能力を醸成するというのが、個人にとってのエンパワーメントであると同時に、よりよいコミュニティの組織化につながるのです。

ですから、誰もが参加しやすい組織をつくっていかねばならない。これまで、非常に結束のかたいコミュニティがあり、住民のために貢献もしてきたわけですが、これからはさまざまな人を受け入れることができるいわゆる橋渡し型のコミュニティへの移行が重要かつ求められていると考えています。みなさんにも少しこの点について考えていただければと思い、本日は話をさせていただきました。ご静聴ありがとうございました。